

## サービスと生産的労働の理論（中）

板 木 雅 彦

### 目 次

はじめに

第1節 サービスとは何か

（1）サービス産業の表象

（2）サービス観念の推移（以上、第18巻2号所収）

第2節 サービス労働とは何か

第3節 サービス産業とは何か（以上、本号）

第4節 サービス産業をめぐる諸問題

（1）運輸・郵便・通信産業について

（2）映画・音楽・書籍出版等のサービス産業について

（3）ソフトウェア産業について

（4）対個人サービスと対事業所サービスについて

（5）二つの「サービス化」現象について

（6）家庭内サービスと公務サービスについて

（7）管理労働について

おわりに

付録：日本標準産業分類（2002年3月第11回改訂）にもとづく第3次産業（大分類、

中分類、一部小・細分類を含む）（本号、第18巻2号所収）

参考文献

（本号、第18巻2号所収）

## 第2節 サービス労働とは何か

サービスとは、物を介することなく——あるいは、物を介するにしてもあくまで補助材料として——、直接に人が人に対して働きかける活動である、という規定をふまえて、この活動を担うサービス労働について検討していこう。問題の焦点は、サービスが人間に直接働きかける活動であるため、通常はその労働の成果が目に見えない形で現われるという点にある。はたして、このような労働は、使用価値を生むと考えてよいのであろうか。

まず、具体的有用労働について振り返っておこう。

生産的「活動は、その目的、作業様式、対象、手段、結果によって規定されている。このようにその有用性がその生産物の使用価値に、またはその生産物が使用価値であるということに、表わされる労働を、われわれは簡単に有用労働と呼ぶ。この観点のもとでは、労働はつねにその有用効果に関連して考察される。」(マルクス [1867] S.56, 57 ページ)

つまり、何らかの使用価値を生み出すものという側面から労働をとらえた場合に、人間の労働は、具体的有用労働と規定することができる。そして、この具体的有用労働の成果は、何らかの有用効果なのである。

「ある一つの物の有用性は、その物を使用価値にする。しかし、この有用性は空中に浮いているのではない。この有用性は、商品体の諸属性に制約されているので、商品体なしには存在しない。それゆえ、鉄や小麦やダイヤモンドなどという商品体そのものが、使用価値または財なのである。・・・使用価値は、ただ使用または消費によってのみ実現される。使用価値は、富の社会的形態がどんなものであるかにかかわらず、富の素材的な内容をなしている。われわれが考察しようとする社会形態にあっては、それは同時に素材的な担い手になっている——交換価値の。」(マルクス [1867] S.50, 48 - 49 ページ)

しかし、このような有用効果は、何らかの素材・物質に客観的に体化(対象化)されていなければならない。商品生産社会であれば、商品体という姿をとって客観的に存在していなければならない。したがって、有用効果を消費するというのは、具体的には、この客観的な素材・物質を一気に、あるいは徐々に消費していくことにほかならない。このことは、鉄や小麦やダイヤモンドといった、生産者からも消費者からも客観的に区別された財の形をとる場合には、きわめて明瞭に理解できる。

「使用価値である上着やリンネルなど、簡単に言えばいろいろな商品体は、二つの要素の結合物、自然素材と労働との結合物である。上着やリンネルなどに含まれているいろいろな有用労働の総計を取り去ってしまえば、あとには常に或る物質的な土台が

残るが、それは人間の助力なしに天然に存在するものである。人間は、彼の生産において、ただ自然そのものがやるとおりにやることができるだけである。すなわち、ただ素材の形態を変えることができるだけである。それだけではない。この、形をつける労働そのものにおいても、人間はつねに自然力にささえられている。」（マルクス [1867] SS.57-58, 58ページ）

では、この労働対象としての物質的自然素材に対して、人間の労働が何を行なうかといえは、その素材の形態を変えることでであると簡単に言うことができる。その場合に人間は、労働力（内的自然）を用いて、労働手段（外的自然）を活用しつつ、もう一つの外的自然である労働対象の形態を変えていくわけである。このことをさらに具体的に述べれば、次のようになろう。

「労働は、まず第一に人間と自然とのあいだの一過程である。この過程で人間は自分と自然との物質代謝を自分自身の行為によって媒介し、規制し、制御するのである。人間は、自然素材に対して彼自身一つの自然力として相対する。彼は、自然素材を、彼自身の生活のために使用されうる形態で獲得するために、彼の肉体に備わる自然力、腕や脚、頭や手を動かす。人間は、この運動によって自分の外の自然に働きかけてそれを変化させ、そうすることによって同時に自分自身の自然〔天性〕を変化させる。彼は、彼自身の自然のうちに眠っている潜勢力を発現させ、その諸力の営みを彼自身の統御に従わせる。」（マルクス [1867] S.192, 234ページ）

ここで何よりも重要な点は、労働力とは自然力の一つであり、人間もまた自然の一員であるという認識である。以上を要約すれば、人間の労働は、改めて生産的労働と規定することができる。これが、生産的労働の本源的規定と呼ばれるものである<sup>1)</sup>。

「要するに、労働過程では人間の活動が労働手段を使って一つの前もって企図された労働対象の変化をひき起こすのである。この過程は生産物では消えている。その生産物はある使用価値であり、形態変化によって人間の欲望に適合するようにされた自然素材である。労働はその対象と結びつけられた。労働は対象化されており、対象は労働を加えられている。労働者の側に不静止の形態で現われたものが、今では静止した性質として、存在の形態で、生産物の側に現われる。労働者は紡いだのであり、生産物は紡がれたものである。この全過程をその結果である生産物の立場から見れば、二つのもの、労働手段と労働対象とは生産手段として現われ、労働そのものは生産的労働として現われる。」（マルクス [1867] SS.195-196, 237 - 238ページ）

したがって、以上の側面から労働を歴史的に位置づければ、次のようになろう。

「労働は、使用価値の形成者としては、有用労働としては、人間のすべての社会形態から独立した存在条件であり、人間と自然とのあいだの物質代謝を、したがって人間

の生活を媒介するための、永遠の自然必然性である。」(マルクス [1867] S.57, 58ページ)

「これまでにわれわれがその単純な抽象的な諸契機について述べてきたような労働過程は、使用価値をつくるための合目的活動であり、人間の欲望を満足させるための自然的なものの取得であり、人間と自然とのあいだの物質代謝の一般的な条件であり、人間生活の永久的な自然条件であり、したがって、この生活のどの形態にもかわりなく、むしろ人間生活のあらゆる社会形態に等しく共通なものである。」(マルクス [1867] S.198, 241ページ)

以上のような具体的有用労働に関する規定をサービス労働に当てはめようとする場合、次のような問題が発生する。サービス労働もまた具体的有用労働であり、有用効果を生み出すことは間違いない。しかし、その成果は、はたして何らかの素材・物質に客観的に体化(対象化)されているのだろうか。わたしたちは、サービス労働の場合にもたしかに物質化・対象化されていると考えたい。

サービスを、物を介することなく直接に人が人に対して働きかける活動であると規定すると、その働きかけ方は当然、人間の身体的な側面に働きかけるか、あるいは精神的な側面に働きかけるかのいずれかになる。言い換えれば、労働対象として人間の身体と精神を分けてとらえることになる。たしかにこの場合、労働者と労働対象の双方から完全に切り離された形で物的生産物が生み出されるわけではない。また、生み出された——あるいは、生み出されつつある——有用効果は、生産と同時に消費(生産的消費と個人的消費)されていくことが多い。そして、いったん消費されてしまえば、財(goods)の場合と同じように、跡形もなく消えてしまうように見える。したがって、サービス労働は、生産の成果の点から見れば素材的・物質的に対象化された使用価値を生まない特殊な労働であるように思われるのである。

しかしはたして、結果としてはっきりそれとわかる何らかの有用効果を生み出した労働が、労働対象にどのような素材的・物質的な形態変化も残さなかった、というようなことがありうるだろうか。もしそのようなことがあるとすれば、そもそもわたしたちは、「何らかの有用効果」が生じたのか生じなかったのかさえ判断することができないことになる。労働の対象が人間の身体である場合にも精神である場合にも、人間そのものが自然の一部である限り、そこにはかならず素材的・物質的に対象化された使用価値が生み出されると考えたい。ただ、新たに付加された使用価値が労働対象と一体となって区別されないことがしばしばあるという点が、財(goods)と異なっているだけである<sup>2)</sup>。

医療・保健・介護といった典型的な身体的サービスの場合にも、医療労働や介護

労働の成果は、患者や老人の身体に明確な痕跡を残す。けっして対象たる身体から切り離された使用価値ではないが、何らかの物理的・化学的・生理的な変化を生ずることではじめて、消費者たる患者や老人は満足し、そのような活動に従事する労働者の労働は社会的に有用かつ必要な労働となることができる。

このような事情は、教育・学習支援サービスでも同様である。学生・生徒の脳細胞に何の形態変化ももたらさない労働は、そもそも有用労働とはいえない。ただこの場合には、学習者の側の努力によっても有用効果の程度が大きく左右されるという特徴をもっている。しかし、この事実は、教育労働が精神的な物的使用価値を脳細胞に付加していることを否定するものではない。教えてもらわなかった英文法は、自学自習しない限り、けっして思い出すことができないのである。同じ論理は、（個人的・生産的）消費者と生産者のあいだに紙やテープ、コンパクト・ディスク（CD）、電子メールといった補助材料を介在させはするものの、基本的に書籍の執筆、新聞制作、音楽演奏、デザイン制作、研究開発などの労働にもあてはまる。ただし、コンピュータ・システムを動かすためのソフトウェア開発は、対人活動とはみなされず、したがって、わたしたちのいうサービス労働ではない。

運輸労働に関しては、人員輸送はサービス労働に分類され、物品輸送は鉱工農業労働の延長とみなされる。この場合の「人員」は、通勤のための労働者を輸送するのでもかまわないし、日曜日の午後買い物に出かける主婦（主夫）や子供でもかまわない。あるいは、兵員輸送でも同じことである。運輸サービスを受けることで、A地点にある人間とB地点にある人間は、明らかに異なる使用価値をもっている。

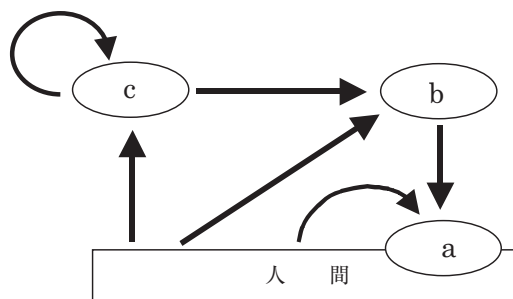
運輸労働が「空間的な移動」にかかわることで新たな物的使用価値を付加するのに対して、保管労働は「時間的な移動」にかかわることで新たな物的使用価値を付加する（たとえば、ワインやウィスキーの貯蔵）。あるいは、適切に保管労働を加えなかった場合に比べて、使用価値の減少を抑える（たとえば、食品の冷凍貯蔵）。ただ、物品の保管は鉱工農業労働の延長であるから、「人間の保管」となると公務労働の中の刑務所職員の労働がそれに該当するかもしれないが、これは「保管」というよりも「保安」というべきかも知れない。

以上の考察から、人間が直接人間に対して働きかけるサービス労働もまた、生産的労働と考えるべきことが明らかになったと思う。対物鉱工農業労働が外の自然に働きかけて客体的な使用価値を生み出すのに対して、対人サービス労働は、人間の内なる自然に働きかけて主体的な使用価値を生み出す。この両者の同一性と区別の認識は、現代の、そして未来

の人間社会の動向を理解する上で、きわめて重要な跳躍点をなすものである<sup>3)</sup>。

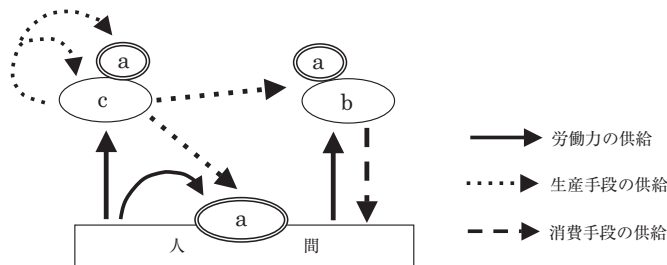
この点、きわめて重要な論点なので、次の置塩の整理について検討しておきたい。

「人間がこのような独特の仕方で行う自然変革活動を生産というのである。意識的に行われる自然への働きかけ、そしてそれによって自然を変化させるという場合、働きかけ、変化させる自然は、外的自然だけではなく、人体そのもの=内的自然をも含んでいることに注意しなければならない。誰でも否定できないように、われわれ人間自身も自然の一部なのである。人体に働きかけ、これを変化させる活動と、外的自然に働きかけ、これを変化させる活動とは、ともに自然変革活動であり、したがってともに生産活動と考えないわけにはいかない。内的自然に働きかけて、これを変化させる活動には、医療、衛生、体育、哺育、休養、教育などがある。さらについで考えると、人間の行う自然変革活動のほとんどは、内的自然に働きかけて、これを一定の条件下に保つためのものであるといえる。外的に自然に働きかけて、食糧、衣服、住居を手に入れるのも、内的自然に特定の物質をとり入れたり、内的自然の近傍の外的自然をある一定条件に保つことによって、結局、内的自然を制御するためである。この場合、食糧、衣服、住居などは、内的自然を制御するための手段の役割を果たしているのである。このような観点からすると、掃除、洗濯、修繕、炊事などもまた生産活動であることが理解されよう。これらのことから、人間の自然変革活動=生産活動には、次の三つのものがあることが分る。(a) 内的自然に働きかけこれを変化させる活動（これをサービス生産と呼ぼう）、(b) サービス生産を行う手段として、外的自然に働きかけてこれを変化させる活動（これを消費財生産と呼ぼう）、(c) 外的自然に働きかけこれを変化させる手段として、外的自然に働きかけてこれを変化させる活動（これを生産財生産と呼ぼう）。これら三つの活動の関連を図示すると上図 [下図] のようになる。この図は、例えば、サービス生産aを行う手段である消費財bを生産するのに、生産財cを用いて人間が自然に働きかけ、それを変化させることを示している。」(置塩, 1980, 85 - 86ページ)



置塩のように、外的自然だけでなく、内的自然＝人体そのものに働きかけることを含めて生産活動であると規定することに対して、わたしたちも全面的に賛成したい。このことは当然、内的自然もまた物質の一つであり、サービス生産の成果（＝有用効果）として物的変化が引き起こされるという理解に導くことになると考えられる。

ただ、ここにはまだいくつか問題点が残されている。たしかに、「掃除、洗濯、修繕、炊事などもまた生産活動である」ことは間違いのないにしても、これらはやはり、サービス生産aではなくて、消費財生産bに含められるべきものである。また、消費財生産bの成果はすべてサービス生産aに投入されるかのように説明され、図示もされているが、実際には消費財の多くがそのまま個人的消費に向けて供給される。さらに、置塩の「サービス生産」は、ここで例としてあげられているように、医療、衛生、体育、哺育、休養、教育などのいわば「個人消費向けサービス」に限定されている。しかし今日では、「企業内サービス」や「企業間サービス」が急速に増大している。以上の諸点を勘案しながら、サービス生産部門a、消費手段生産部門b、生産手段生産部門cのあいだの関係を図示すれば、次のようになるだろう。なお、サービス生産部門aから供給を示す矢印が出ていないのは——置塩の元の図がそうであったように——サービス部門の有用効果の多くが物財に体化されないことを示している。

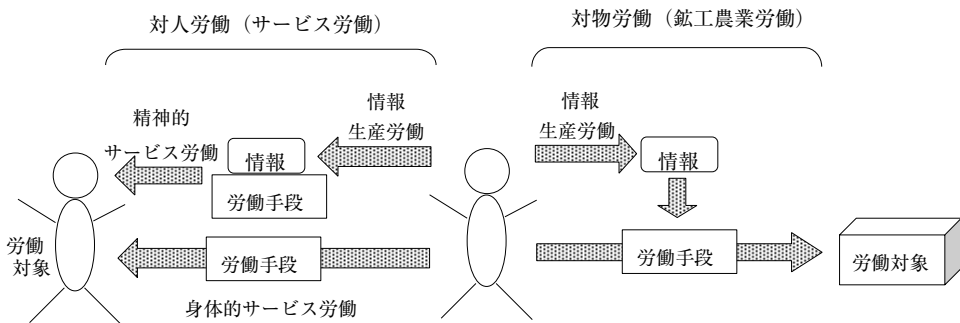


すでに触れたように、サービス労働を直接に人が人に対して働きかける労働と規定すると、労働対象の違いに応じて、人間の身体的な側面に働きかける**身体的サービス労働**と、精神的な側面に働きかける**精神的サービス労働**とに区別することができる。言い換えれば、労働対象である人間（＝内的自然）を脳とそれ以外とに区分する分類基準である。身体的サービス労働の場合には、医療、保健、介護、スポーツなどを思い浮かべると明らかのように、何らかの形で身体と身体との直接的な接触がともなう。これに対して精神的サービス労働の場合には、対象たる脳に直接接触するのではなく、**情報**を媒介にして働きかけを行なうことが特徴である。

ここで情報の問題について詳しく論ずる用意はないが、いくつかの論点に絞って簡単

に触れておきたい。第一に、情報は、対物労働が行なわれる際にも重要な投入要素として機能するが、これに加えて対人的な精神的サービス労働と関係付けることによって、労働価値説との接点が明確になるという点である。つまり、具体的有用労働が労働対象たる脳に働きかける際の媒体としての情報である。第二に、このことによって、中世のDienst以来のサービス労働発達史の中に情報を位置づける視角が生まれるという点である。第三に、人と直接に接する精神的サービス労働の前段として、この媒体そのものを生産する労働——すなわち、**情報生産労働**——が存在し、発達することによって、サービス労働の投入量が、事実上無限に拡大していきける物的基盤を獲得したという点である。ここには、人類の精神生活のいっそうの充実と発展という歴史貫通的的要因とともに、現代資本主義社会特有の「情報膨張の法則」が働いていると考えられる。そしてそこには、投下された情報生産労働の消尽と、独特の産業構造の「歪み」が観察されると考えられる。

以上の考察の結論を一言でまとめるとすれば、次のようになろう。すなわち、人間の具体的有用労働は二つの種類に分けられ、その一つが**対物労働（鉱工農業労働）**であり、もう一つが**対人労働（サービス労働）**である。サービス労働はさらに、人間の身体的な側面に働きかける**身体的サービス労働**と、精神的な側面に働きかける**精神的サービス労働**とに分けられる。これらの労働の諸形態は、いずれも歴史貫通的な性格をもち、どのような社会のもとでも存在していなければならない労働の種類である<sup>4)</sup>。



ただここで、サービス労働の意味をいっそう明確にしておくために、流通業と金融業における労働の問題を取り上げておきたい。というのも、この二つの分野の労働は、一般には典型的な「サービス労働」とみなされることが多いからである。マルクスは、流通業の問題について次のように述べている。

「変態 W - G と G - W は、買い手と売り手とのあいだで行なわれる取引である。このような取引がまとまるためには時間が必要である。・・・状態の変化には時間と労働力が必要であるが、しかし、価値をつくりだすために必要なのではなく、一方の形



態から他方の形態への価値の転換をひき起こすために必要なものであって、このことは、互いにこの機会に乗じて余分な価値量を取得しようとする試みがなされても、少しも変わらないのである。・・・この労働——それは全体としての資本主義的生産過程の一つの必然的な契機であって、この全体性のなかでは生産過程は流通をも含んでいるか、または流通のなかに含まれているのであるが——は、熱を起こすために用いられる材料の燃焼労働のようなものである。この燃焼労働は、燃焼過程の一つの必然的な契機ではあるが、熱を発生させるものではない。」（マルクス [1885] SS.131 - 132, 159ページ）

「一般的な法則は、ただ商品の形態転化だけから生ずる流通費はすべて商品に価値をつけ加えない、ということである。流通費はただ価値を実現するための、または価値を一つの形態から別の形態に移すための、費用でしかない。この費用に投ぜられる資本（これによって指揮される労働も含めて）は、資本主義的生産の空費に属する。その補填は剰余生産物のうちからなされなければならない。そして、この補填は資本家階級全体について見れば、剰余価値または剰余生産物からの控除をなす」。（マルクス [1885] S.150, 182ページ）

この二つの引用の中では、具体的有用労働の問題と価値の問題が合わせて論じられているので、注意が必要である。結論としてマルクスは、流通業における労働が価値も剰余価値も生み出さないと考えているが、この結論は、流通労働が具体的有用労働に該当しないという点から導き出されている。言い換えれば、流通労働は、物質的使用価値を生み出さない不生産的労働である。

わたしたちが普段目にする「流通業」というのは、購買・販売活動のほかに運輸・保管活動を付随していることが多い。また、生産の無政府性を特徴とする資本主義社会では、社会的分業の調整過程の一部を担っていると見ることもできる。しかし、これらの機能を除外して考えれば、流通労働の独自の機能というのは、「ただ価値を実現するための、または価値を一つの形態から別の形態に移すための」労働、「価値をつくりだすために必要なのではなく、一方の形態から他方の形態への価値の転換をひき起こすために必要な」労働である。言い換えれば、流通労働が行なっている労働は、物質（対外的・対内的自然）を処理しているのではなくて、私的所有権を処理しているに過ぎないわけである。この点は、金融労働も同様である。流通労働が商品資本の流通機能を担っているのに対して、金融労働は資本商品の流通機能を担っている。使用価値に対する私的所有権の創造・移転・分配を担う機能が、流通・金融労働に独自の機能であるということが出来る（ドゥロネ、ギャドレ [1987] 80 - 81ページ）。

なお、一つ目の引用で触れられているように、現実には、産業資本が行なう活動の一部に流通活動が含まれていることが多い。このような場合には、この流通活動に従事する労働も不生産的労働の一部を構成している点に注意が必要である。逆に、生産手段や消費手段を製造する労働であっても、その生産手段が流通業に投入されたり、消費手段が流通労働者によって消費されたりすることは大いにありうる。この場合には、最初に生産手段や消費手段を製造するために投入された労働は使用価値を生み出す生産的労働であるが、この生産物が流通業に投入されることで社会的空費となって消耗されることになる。ただ、このことは使用価値的にのみいえることで、価値的には、あたかも生産的部門同様に価値を生み出すものとして現われ、一種の「虚偽の社会的価値」を生み出す点に関しては、後に詳しく検討することにしたい。

### 第3節 サービス産業とは何か

わたしたちはこれまで、サービスとは何かを明らかにし、さらにこれを提供するサービス労働を歴史貫通的な形態において論じてきた。以上をふまえて本節では、このサービス労働が商品を生産して価値を生みだし、一つの産業として成立する諸条件を考察していこう。これを明らかにするためには、生産的労働と不生産的労働の区別について検討しなければならない。まず、この問題に関するマルクス自身の見解について見ておくことにしたい。

「労働過程は、まず第一に、その歴史的諸形態にはかかわりなく、人間と自然とのあいだの過程として、抽象的に考察された。・・・労働過程全体をその結果の立場から見れば、二つのもの、労働手段と労働対象とは生産手段として現われ、労働そのものは生産的労働として現われる。・・・このような生産的労働の規定は、単純な労働過程の立場から出てくるものであって、資本主義的生産過程についてはけっして十分なものではない。」(マルクス [1867] S.531, 659ページ)

これは、経済社会の歴史的な性格にかかわりなく成立する「**生産的労働の本源的規定**」(同, s.532, 660ページ)と呼ばれるものである。すでに前節で詳しく検討してきたように、ここでいう「自然」を、人間に対する外的自然と内的自然をともに含むものととらえることで、わたしたちは、サービス労働もまたこの意味における生産的労働とみなすことができる。しかし、マルクスは、この本源的規定に続けて、「**生産的労働の歴史的規定**」を与えている。

「ところが、他方では、生産的労働の概念は狭くなる。資本主義的生産は単に商品の生産であるだけでなく、それは本質的に剰余価値の生産である。労働者が生産をするのは、

自分のためではなく、資本のためである。だから、彼がなにかを生産するというだけでは、もはや十分ではない。彼は剰余価値を生産しなければならない。生産的であるのは、ただ、資本家のために剰余価値を生産する労働者、すなわち資本の自己増殖に役だつ労働者だけである。物質的生産の部面の外から一例をあげることが許されるならば、学校教師が生産的労働者であるのは、彼がただ子供の頭に労働を加えるだけではなく企業家を富ませるための労働に自分自身をこき使う場合である。この企業家が自分の資本をソーセージ工場に投じないで教育工場に投じたということは、少しもこの関係を変えるものではない。それゆえ、生産的労働者の概念は、けっして単に活動と有用効果との関係、労働者と労働生産物との関係を包括するだけではなく、労働者に資本の直接的増殖手段の極印を押す一つの独自に社会的な、歴史的に成立した生産関係をも包括するのである。」（マルクス [1867] S.532, 660ページ）

つまり、資本主義という特殊歴史的な社会においては、労働がたんに自然に働きかけて使用価値を生むだけでなく、まず商品を生産して価値を生み出し、さらには資本家に剰余価値を生み出すものでなければ、生産的労働には該当しないことになる。

ここで一つ留意しておくべき点がある。マルクスの「歴史的規定」が『資本論』第1巻14章「絶対的および相対的剰余価値」で与えられた規定であるという点がそれである。つまり、第3巻の生産価格・市場価格論の前段としての価値論のレベルにおける規定であるという点である。資本家にとって、自分が雇用する労働者の労働が「生産的」であるか否かの判断基準は、その労働者の生産する商品が一定の価格で販売でき、一定の利潤をもたらすかどうかにある。資本家にとっては、その価格が価値に裏づけられたものであるか、あるいはその利潤が剰余価値に裏づけられたものであるか、という問題は、どうでもよい問題である。ここでいう「歴史的規定」とは、まさにこのような資本家の目から見た生産的か否かの判断基準について述べたものである。したがって、わたしたちはむしろ、マルクスの規定を第3巻レベルまで上向させ、当該の労働によって生産された商品が一定の価格で販売され、資本家に一定の利潤をもたらすことをもって、生産的労働の歴史的規定と理解することにしたい。

ではさらに、労働が価値を生み出すための諸条件を改めて考えてみることにしよう。この点に関して、マルクスは次のように述べている。

「およそ使用対象が商品になるのは、それらが互いに独立に営まれる私的諸労働の生産物であるからにはかならない。これらの私的諸労働の複合体は社会的総労働をなしている。生産者たちは自分たちの労働生産物の交換をつうじてはじめて社会的に接触するようになるのだから、彼らの私的諸労働の独自の社会的性格もまたこの交換においてはじめて現われるのである。言い換えれば、私的諸労働は、交換によって労働生産物がおかれ労働生産

物を介して生産者たちがおかれるところの諸関係によって、はじめて実際に社会的総労働の諸環として実証されるのである。」(マルクス [1867] S.87, 98ページ)

「だから、人間が彼らの労働生産物を互いに価値として関係させるのは、これらのものが彼らにとっては一様な人間労働の単に物的な外皮として認められるからではない。逆である。彼らは、彼らの異種の諸生産物を互いに交換において価値として等値することによって、彼らのいろいろに違った労働を互いに人間労働として等値するのである。彼らはそれを知ってはいないが、しかし、それを行なうのである。それゆえ、価値の額に価値とはなんであるかが、書いてあるのではない。価値は、むしろ、それぞれの労働生産物を一つの社会的な象形文字にするのである。あとになって、人間は象形文字の意味を解いて彼ら自身の社会的な産物の秘密を探りだそうとする。」(マルクス [1867] S.88, 99 – 100ページ)

このようなマルクス自身の考えにもとづきながら、抽象的人間労働がいかにして価値に転じ、労働生産物がいかにして商品に転ずるかを考える場合に、三つのことを注意深く区別しなければならない。つまり、社会的労働が互いに独立した私的労働として営まれる三つのケースの区別である。

外的自然・内的自然に変化を加え、社会的に有用な使用価値を生み出す労働の成果が商品となって市場で交換される——これが一つ目のケースである。この場合、それぞれの労働は、互いに独立した私的労働として営まれているから、交換に成功することではじめてその社会的有用性が実証されることになる。そして、そのことによって自らが「価値物」であること——つまり、価値をもっているということ——を社会的に実証する。このケースでは、使用価値をもつこと、商品として交換されること、そして価値をもつことの三つが、互いに切り離しがたく結びついていることができる。

これに対して二つ目のケースは、外的自然・内的自然に変化を加え、社会的に有用な使用価値を生み出す労働であるにもかかわらず、そのような労働の成果が市場交換に出されないことによって商品の形態をとらないケースである。つまり、使用価値を生み出すが、商品とならず、したがって価値をもたないケースである。特定の主人と個人的・属人的に結びついた召使の労働や、家庭内の家事労働、ボランティアの労働がこれにあたる。

最後に三つ目のケースは、私的所有権の処理を行なうだけで、なんら外的自然・内的自然に変化を加えるわけではなく、社会的に有用な使用価値を生み出さない労働であるにもかかわらず、その労働の成果が「商品」として交換されることで、あたかもその労働が価値を生み出したかのように現象するケースである。流通業や金融業における労働がこれにあたる。「流通サービス」「金融商品」といった擬制された商品形態

が市場で交換されることになる。

ただし、流通業や金融業の場合にも人間の労働が投入されている事実是否定することができないし、その労働は、「人間の脳や筋肉や神経や手などの生産的支出」（マルクス [1867] ss.58 - 59, 59 - 60 ページ）であるという点からみれば、抽象的人間労働である。しかし、そのような労働が外的自然にも内的自然にも何ら変化を加えることなく、たんに私的所有権の処理（商品資本の流通と資本商品の流通）にしかかかわっていないという意味で、具体的有用労働の資格を欠いているわけである。したがって、本来ならば価値に転ずるはずの抽象的人間労働が、価値の担い手である使用価値を欠くことによって価値に転ずることができず、使用価値も価値ももたない擬制された「商品」——価格だけをもった「商品」——の形態を受け取ることになる。これが流通「サービス」や金融「商品」の実態である。

わたしたちはここで、流通業や金融業における労働があたかも価値を生み出したかのように現われる現象を、**虚偽の社会的価値**という概念でつかみたいと考える。使用価値も価値ももたないものが、価格をもった商品として市場で交換され、資本家に利潤をもたらすことから事実が転倒して現われ、あたかも価値も使用価値ももっているかのように認識されてしまう現象がそれである。この「虚偽の社会的価値」という概念は、もともと差額地代に対して使用された概念である<sup>5)</sup>。すなわち、最劣等地の豊度によって農産物の市場価値が決定されるため、そこよりも豊度の高い土地の農産物は、より少ない労働が投入されているにもかかわらず、あたかも最劣等地と同じ労働量が投入されて、それに等しいだけの社会的価値をもつものとして評価されることになる。この社会的価値と個別的価値の差額が虚偽の社会的価値である。差額地代の場合には、使用価値的な実体はもっているが労働に裏づけられた価値の実体をもっていないという意味で、この概念が使用されている。使用する文脈は異なるものの、使用価値的にも価値的にも実体ももたないものが、社会的にあたかも価値あるものとして認められるという意味においても——論理次元の違いを意識しつつ——この概念を活用することは可能であろう。

以上から、わたしたちは、生産的労働と不生産的労働の区別について三つのケースに分けて考えることができる。

第一に、当該の労働が対物鉦工農業労働か対人サービス労働であって、その成果が商品の形態をとる場合である。あるいは、その対物鉦工農業労働・対人サービス労働が賃労働として使用され、資本家に利潤を生む場合である。このような場合には、当該の労働は、本

源的規定においても歴史的規定においても生産的労働である<sup>6)</sup>。

第二に、当該の労働が対物鉦工農業労働か対人サービス労働であるが、その成果が商品の形態をとらない場合である。特定の主人と個人的・属人的に結びついた召使の労働や、家庭内の家事労働、ボランティアの労働がこれにあたる。この場合には、本源的規定においては生産的労働であるが、歴史的規定においては不生産的労働である。

第三に、当該の労働は、対物鉦工農業労働でも対人サービス労働でもなく、たんに私的所有権の処理（商品資本の流通と資本商品の流通）にかかわっている。しかし、その成果は価格をもち、擬制的な商品の形態をとる。このような流通労働、金融労働の場合には、本源的規定においては不生産的労働であるが、歴史的規定においては生産的労働である。

本節の理論的な結論としては、資本主義におけるサービス産業とは、サービス労働が独立した商品生産部門として成立したものをいう。その経営形態は、小商品生産経営（自営業）と資本主義的大経営のいずれをも含んでいる。

(次号へ続く)

(付録および参考文献に関しては、第18巻2号所収)

## 注

- 1) 金子 (1966) 第2章, (1998) 序論第2章参照。
- 2) 「遂行された労働の成果は有用的である。その成果は物質的である（それを非物質的と呼ぶのは、言葉の濫用である）」(ドゥロネ, ギャドレ, 2000, 96ページ)。とくに現代では、「物質的生産と非物質的生産との間に明確な区別がなくなっていることである。ただ生産物の物質的な発現の仕方がさまざまに異なっているだけである。」(同, 90ページ)
- 3) サービス産業を中核とする脱工業化社会においては、近代資本主義を特徴づける搾取や疎外の問題があたかも解消するような幻想を振り撒いたとはいえ、次のベルのことは、今日でもなお傾聴に値する。

「新しい関係の中心をなすものは、出会いまたはコミュニケーション」である。そして、「今や個人が機械とかかわりをもつのではなく、他の個人に話しかけるという事実は、脱工業社会における仕事の基本的な事実である。」(ベル [1973] (上) 219ページ)

「脱工業社会はサービスに基礎を置いている。したがって、それは人と人とのゲームである。重要なのは、生身の筋力でもエネルギーでもなく、情報である。その中心をなす人間は専門職である。なぜなら、教育と訓練によって、彼は脱工業社会でますます必要とされる種類の技能を提供できるように装備されているからである。もし工業社会が、生活水準の基準として、財貨の量によって定義されるものであるとすれば、脱工業社会は、今やあらゆる人々にとって望ましく、可能であると見られているサービスと楽しみ——保健、教育、レクリエーション、芸術——を尺度とする生活の質によって定義される。」(同, 173 - 174ページ)

- 4) サービス、あるいはサービス労働に関する日本の代表的見解に関しては、次のように整理することができる。まず、封建的なDienstを思い浮かべながら、収入から支出される、価値を生まない消費活動がサービスであるととらえ、対人サービスに加えて仕立て、修理、清掃などの「対物サ

サービス」も含めてサービスと考える見方——「サービスとは、資本によって雇用される賃労働と対立する意味での、収入（または所得）によって雇用される賃労働のことである」（金子，1998，7ページ）——に関しては，金子（1966）（1998），渡辺（1985），大吹（1994）を参照。

これに対して，サービス労働は，物質に対象化されていない流動状態（「不静止の状態」（マルクス [1867] S.195，238ページ）のままで価値を生み商品となる，という見解に関しては，赤堀（1971）（1982）参照。なお，これに対する批判については，金子（1998）序論第1，2章を参照。

物質に対象化された生産物ではなく，「非物質的な有効効果」を生むものがサービスであるという観点から，運輸・保管業もサービスととらえる見方に関しては，飯盛（1985）を参照。

わたしたちと同じように，人間を労働対象とする労働をサービスととらえ，「対物サービス」を否定する見方に関しては，斎藤（1986）（2001），櫛田（1982）（1987）（1988）（1996-98）を参照。ただし，斎藤，櫛田はサービス労働が労働力の再生産に投じられた場合にのみ価値を生み出すと考えている。

他の種類の労働と同じように，サービス労働によって生み出されるサービスも物質的生産物であると理解するものとして，馬場（1989，第1章）参照。わたしたちもサービス労働が物質的に有用な作用を及ぼすと考えるが，サービスそのものが物質的生産物であるとは考えない。馬場によれば，クリーニング・清掃労働，運輸・保管労働もすべてサービス労働となる（同，37ページ）。

最後に，マルクスのもっとも抽象的なサービス規定（マルクス [1867] S.207，252ページ）に依拠しながら，人間労働だけでなく「商品の有用的働き」も含めてサービスと定義し，運輸・通信業や物品賃貸業（レンタル業）もサービス業に含める見解に関しては，長田（1989）（2001）を参照。

- 5) 「[差額地代の規定は] 資本主義的生産様式の基礎の上で競争の媒介によって実現される市場価値による規定である。この規定は，ある虚偽の社会的価値を生み出す。これは，土地生産物が従わされる市場価値の法則から生ずる。生産物の，したがってまた土地生産物の，市場価値の規定は，社会的に無意識に無意図に行なわれる行為だとはいえ，一つの社会的行為であって，この行為は必然的に生産物の交換価値にもとづくもので，土地やその豊度の相違にもとづくものではない。」（マルクス [1894] S.673，852ページ）
- 6) ここで，すでに上で引用したマルクス [1867] S.532，660ページの内容について若干触れておきたい。というのも，この箇所でもマルクスが取り上げている「教育労働」がこれまでしばしば論争の素材となっており（例えば，金子，1998，第3章を参照），この論点を正確に押さえておくことが「対人サービス労働=内的自然への働きかけ=本源的規定における生産的労働」という理解をいっそう補強するものになると考えるからである。マルクスは，生産的労働の本源的規定を述べたすぐ後で，「ところが，他方では，生産的労働の概念は狭くなる」と述べて，歴史的規定の説明に入る。そして，これを例証するために，「物質的生産の部面の外から一例をあげる事が許されるならば」として，教育産業に従事する賃労働について論じ始める。ここからわかるように，マルクスは，まず教育労働そのものを本源的規定における生産的労働とみなしており，さらに教育労働が賃労働として資本家に利潤を生む場合には，歴史的規定においても生産的労働であると考えていたことがわかる。続いてマルクスは，教育労働の内容に関して「子供の頭に労働を加える」と述べて——たんに諧謔的な言い回しというだけでなく——，「子供の頭」を物的労働

対象と考えていることを示唆する。このことは、生産の主体であり消費の主体である人間を物に貶めるということではなく、人間の内的自然に働きかける精神的サービス労働の対象としてみれば、やはり人間も物的労働対象であるという事実を率直に表現したものに過ぎない。そして実際、教育労働の結果として子供の頭は、化学的・生理的な変化を起こすことになる。このことは、すでに触れたように、教えられる英文法は——自学自習しない限り——けっして思い出すことができないという一事からも明らかであろう。

なお、『剰余価値学説史』の中の次の一節は、解釈上、十分な注意が必要である。「教師は教育施設企業家のための単なる賃労働者でありうるし、また、この種の教育工場がイギリスには多く存在する。こうした教師は、生徒にたいしては、生産的労働者ではないけれども、自分の企業家にたいしては生産的労働者である。企業家は自分の資本と教師の労働能力とを交換し、この過程を通してふとこころを肥やす。」(マルクス [1965] S.386, 522 - 523 ページ, 傍点原著者) ここでマルクスが「生徒にたいしては、生産的労働者ではない」というのは、企業家に対して利潤を生むという意味の歴史的規定が、対生徒の関係では当てはまらないという意味である。けっして、本源的規定において不生産的であるという意味ではない。このことは、上の引用に続けて「劇場や娯楽施設などの企業の場合にも同じである。この場合、俳優は、公衆にたいしては芸術家としてふるまうが、自分の企業家にたいしては生産的労働者である。」(同, 傍点原著者) と述べていることからわかる。

(板木雅彦, 立命館大学国際関係学部教授)

## A Theory of Service and Productive Labor (II)

The 'service controversy' has been under way since the 1950s in Japanese academia, wherein some very fundamental questions have been fiercely debated, such as 'What is service?' and 'Is service labor productive?' The present paper critically reviews the controversy and constructs the conceptual backbone for the analysis of the contemporary globalization of services in trade and investment.

The second part of the paper intends to answer the two questions: firstly, is service labor productive? Service labor, as concrete useful labor, embodies itself in useful effects of physical materials as the object of labor, although the object of service labor is other human beings' body and/or mind, rather than some objective materials. In this sense, service labor is as productive as material-producing labor, such as agricultural and manufacturing labor, is; and it is categorized into bodily service labor and mental service labor.

Secondly, in what sense is service labor productive? It is productive in the trans-



historical sense that it transforms human beings' internal, rather than external, nature with some useful effects on it. It can be productive in the historical sense in capitalism, however, as long as it produces surplus value or profits for its capitalist employer. Financial labor, for example, is not productive service labor in the first sense, but productive 'service' labor in the second sense. (To be continued.)

(ITAKI, Masahiko, Professor, College of International Relations, Ritsumeikan University)